

2022年10月9日

説教「あなたがたより先に」 マルコによる福音書 14章 27～31節

牧師 小林 恵

人間は、他人のことをどれくらい理解しているのでしょうか。おそらく、思うほどには理解していないのではないのでしょうか。もし人間がお互いの事を理解し得ているならば、誤解や行き違いなど人間関係における様々な衝突やトラブルは起きないでしょう。人間は、他人の事についてはわからないのです。

とはいえ、人間が他人のことをまったく理解していないのかというと、そうではありません。2千年前の主イエスの弟子たちもまた、主イエスとはどういうお方なのか、何を考え何を求めておられるのかを彼らなりに理解しようとしていたのでしょう。というのは、弟子たちは主イエスの受難と死、そして復活という内容を主御自身から3度も聞いていたからです。それで何も思わないはずはないでしょうし、たとえ理解できなくても、それがただならぬ事態であることを弟子たちはどこかで意識していたに違いないと思うのです。

ただならぬ状況が、ついに決定的となってしまいます。ユダヤ社会において盛大に行われる過越しの祭りの時に主イエスが弟子たちと食事をされた、あの最後の晩餐の冒頭で主イエスは弟子たちに重大なことを言われました。それは、弟子の一人が御自身を裏切ろうとしているという内容でした。言うまでもなく、イスカリオテのユダの裏切りについてのことでしたが、弟子たちは皆「まさか、わたしではないでしょう」と心穏やかではありませんでした。そんな重苦しい状況の中、本日与えられた14章27～31節において、弟子たちの思いはさらに不安をつのらせていくことになります。

事の発端は、弟子たちに対する主イエスのこの発言でした。「あなたがたは皆わたしにつまずく。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散ってしまう』と書いてあるからだ」（27節）。これは、旧約聖書のゼカリヤ書13章7節の引用で、内容としては羊飼いである主イエスが打たれる、つまり主イエスの受難と死において羊である弟子たちは逃げ去ってしまうことが、ここで予言されているのです。

注目したいのは、これに対するペトロの反応です。彼は主イエスにこう豪語しました。「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」。立派な発言のようにも思えますが、ある注解者はこのペトロの心理を、弱さの表れだと言っています。これはペトロの強さからでたものではなく、むしろただならぬ気配に耐え切れない弱さのあらわれであって、内面の不安をかき消すための反動に過ぎないのだと言います。

このペトロの弱さを、主イエスは受け止めておられました。そのうえで、ペトロの3度の否定を予告されるのです（30節）。これに対して、ペトロはさらに言い張ります。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」（31節）。しかも、「皆の者も同じように言った」と記されています。この弟子たちの姿は、私たち自身の姿でもあるのだと聖書は伝えているようにも思います。ならば、救いはどこにあるのでしょうか。弟子たちを、そして私たちを立ち上がらせる希望は、いったいどこに見出されるのでしょうか。

それは、28節の主イエスの言葉にあります。「しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」。「ガリラヤ」とは、主イエスと弟子たちの言わば宣教の原点です。この場所に、

復活の主が先にいてくださるということです。「先に」とは「先立って」という意味で、主イエスが私たちに先立っていてくださるということです。先立ってくださるとは、その後に私たちが従っていくということであり、それは先立たれる主が私たちを呼び出し、招いてくださるということです。

ここに、一つの流れが見えてきます。それは、羊飼いなる主の十字架によって散らされる私たちは、私たちに先立ち、私たちを呼び出し招かれる主によって集められる羊なのだということです。散らされて、集められる、これはとりもなおさず、私たちの信仰の歩みにほかなりません。

散らされて、集められる私たちには、明らかな動機が与えられています。それは、主イエス・キリストの十字架と復活によって与えられる神の憐れみとゆるしの恵みを、一人でも多くの人たちに証していくという動機です。礼拝の恵みから押し出される私たちは、その恵みを私たちの生きる生活の中で証していくのです。そこに押し出してくださる主イエス御自身が、先立って私たちを導いてくださいます。そして、私たちを再び宣教の原点である礼拝の恵みへと招き集めてくださるのです。

私たちが一つ一つの点であるとするならば、個性や生き方、価値観などあらゆる面で違いがあるゆえに重なり合うことはないでしょう。しかし、その点が重なっていけば、一つの線になります。ただし、すべての点が同じ方向に向いていないと、一直線にはなりません。私たちに先立っていてくださる主の方を皆が向いていなければ、私たちは一つになることはできません。主にあって一つとされるために、私たちは今、この礼拝へと集められているのです。

このような声を聞くことがあります。“もしも本当に神がおられるなら、私の人生を導いてくださるはずだ”と。“もしも”ではなく“確かに”主が私たちよりも先にいてくださるゆえに、私たちの人生が導かれているのです。その恵みを共に感謝して歩んで行きたいと思います。